

共生・公正・創造



東日本タイムズ号外

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~JRTU-HWU/>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【シリーズ26】

J R 東日本労政の問題点回顧

松田昌士 J R 東日本第二代社長の “ 変心 ” とその後の行動に疑義あり！

住田正二氏の後を受けて第二代の J R 東日本社長に就任した松田昌士氏が松崎氏と親密な関係を築き、東労組中心の労使関係を強固にしたのは有名な話である。

J R が発足し、J R 東日本の労務担当役員としてスタートした当初の松田氏は、「いずれは革マル派排除」の “ 志 ” を胸中に秘めて、腹心の部下達と共にいろいろとそのための勉強会を行っていたと言われている。筆者が得ている情報では、松田氏のこの姿勢は、J R 東日本が発足した昭和 6 2 年 4 月以降平成 2 年頃までは続いたようだ。しかし、発足直後の「鉄労系組合員の脱退とその白紙撤回・復帰」騒動 < * > にかからむ大失態にもかかわらず社長就任の可能性がチラホラしてきた辺りから松田氏の心境に変化が生じたらしく、その後急速に松崎氏への傾斜を深めて行った模様だ。

そして松田労政の決定的な転機となったのは、平成 3 年、J R 東労組が山形県天童市で開催した「ユニオンスクール」で、松崎氏はその場から松田氏を電話で呼びつけ、松田氏は飛行機で急遽駆けつけたことだと言われている。取るものもとりあえずといった形で会場に姿を見せた松田氏は、松崎氏と東労組役員及び組合員を前にして、「私は、J R 東日本の施策を実施するに当たっては、松崎委員長始め J R 東労組のみなさんと十分相談し、了解をいただきながら何事も進めて参りたい」との趣旨を述べたという。

そして、目出度く J R 東日本社長となった松田氏は、正にその際の言葉どおりの行動を執り、J R 東日本では革マル関連問題の話題は厳禁、「憚られること」、「タブー」となり箱根以西の J R 各社とは 1 8 0 度異なる労使関係 = 「J R 革マル派完全支配の東労組一辺倒の労使関係」が出来上がってしまったのである。

ともあれ、筆者の見解では、松田氏の変心 (= 思想的に “ 嫌悪 ” していた筈の松崎氏への急傾斜) と併せて、住田・松崎間の強固な “ 親密関係 ” と両氏の提携・協力があったからこそ、「松田副社長の社長昇格」が実現したのだと思う。

< J R 東日本労政 『二十年目の検証』 184 ページから 185 ページより抜粋 >

報道によると、2005年12月7日、警視庁公安部が、業務上横領の容疑で J R 総連本部・東労組本部・役員の実家など関係先 20 数カ所を家宅捜索した。2000 年ごろ、J R 総連と東労組の元幹部数人が J R 総連の内部組織が管理する資金を私的に流用した疑いが持たれている。

民主化の声・声・声・・・

2005.12. 9 その26

(読んではいけない?) 「小説労働組合」の読み方! (6)

～ JR総連傘下「九州労」大量脱退事件の真相～



* 鉄道連合有志役員会議に南国鉄道労組のもぐり込み戦術が初めて報告されたのは、南国鉄道労組で取り組みが始まって一ヵ月も経った10月末である。報告を聞いた鈴木は耳を疑った。「何という無謀な取り組みだ。現情勢や彼我の力関係をどう分析したのか。今はこれまでの南国鉄道労組の組織強化、拡大の取り組みを徹底して総括し、それに基づいて新たなたたかいを取り組むことが大切ではないか」 鈴木の見解に若い川下書記長も同調の意思を示したが、議論はそこまでで終わった。大元の意を受けて行動してきた一部の幹部たちは、鈴木に同調などできるはずもなかった。軽部委員長が議論をまとめて言った。「すでに、船は出発したのだ。今更、いいとか悪いとかを言ってもはじまらない。取り組みが成功するように、奮闘していく以外にはない」(p. 36～37)

* 「鈴木は又、そんな机上の空論を言っているのか。重要なのは評論ではない。実践することだ。文句を言う鈴木こそ問題だ」 側近の報告に大元は不愉快になっ

東労組の組合員が配っている本であり、解説書まで出回っているわけであるが、告訴好きの団体のことを考え個人名は極力避けると、おそらくこの文脈の読み方は次のとおりであろう。

【鉄道連合有志役員会議に九州労のもぐり込み戦術が初めて報告されたのは、現地九州労での取り組みが始まって一ヵ月も経った10月末だった。報告を聞いた鈴木(F氏)は愕然とし、そしてその無謀性などを強く批判した。鈴木批判的意見に、鉄道連合書記長のY氏のみが同調の意を示したが、この間、大元(M氏)の意に添って行動してきた他の幹部たちは鈴木(F氏)の見解に同調などできる筈がなく、鉄道連合O委員長が、「すでに、船は出発したのだ。今更いいとか悪いとかを言ってもはじまらない。取り組みが成功するように奮闘していく以外にはない」と、その場の議論を集約した。側近からの会議報告に大元(M氏)は、「鈴木は又、そんな机上の空論を言っているのか。重要なのは評論ではない。実践することだ。文句を言う鈴木こそ問題だ」と不快感を露わにした。】

大元(M氏)が鈴木(F氏)を公然と社会的に葬り去ろうとした真の理由は、鈴木が「労働問題研究所」構想(自然と人間社の会社化構想)に反対したからだけではなく、南国鉄道労組問題(JR九州労大量脱退問題)にも反対したからだったとは・・・。それにしても、「労働問題研究所」構想(自然と人間社の会社化構想)と同じく、大元(M氏)の一声は鶴の一声よりも絶対的なものらしい。